

(2) 自閉スペクトラム症リスク児の早期療育に関する研究

—共同注意と相互的な関わりを中心に—

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程 ○頼田 智美

川崎医療福祉大学医療福祉学科 諏訪 利明

【要 旨】

近年、ASDを中心とした発達障害に対して社会的関心が強くなっている。その理由として、発生率の高さや未診断のまま成長する過程で問題が表面化するケースの増加、犯罪事例における発達障害の診断・鑑別の増加などが挙げられ、ASD児者に対する支援の遅れや不足、不適切さが指摘されている。加えて、ASDの中核である対人相互性の障害に関係する社会脳の発達には臨界期がある可能性があり、早期支援・療育の必要性はますます高まっている。その早期療育の方法については、先行研究から、共同注意や関わりの重要性が指摘されている。そのため本研究では、発達早期のASDリスク児を対象に、共同注意や関わりを増やす介入を行うことによる対人相互性の変化を検討することを目的とする。対象者は1歳6か月健診でASDリスクがあると判断された後、CARSによりASDリスクが確認された男児1名で、療育は自治体の保健センターで1回45分、全8回という設定で実施し、全ての場面につい

てビデオ撮影を行う。また家族には療育に同席してもらい、各回の療育の様子を見てもらうこととした。研究方法としては、①療育開始前と終了後にアセスメントを実施し、その変化を分析するとともに、②療育実践の中での、遊びの水準、関わりの時間と内容、共同注意の回数と内容、要求行動の回数と内容の変化をそれぞれ分析することとした。その結果①では全体的な発達状況に大きな変化は見られなかったが、標的としていた対人相互性に関連する共同注意や要求行動が増え、社会性領域の伸びが見られたことが確認できた。また②においては、初回と最終回の比較を行ったところ、共同注意や要求行動の回数が3倍以上になり、関わりも相互的なものが増え、遊びでは象徴遊びが出現した。これらの変化が起こった要因としては、人を意識することを最重要視した療育を実施したことや、構造化により場面が整理され、自己選択や自発性が伸びたことなどが考えられるが、今後さらに考察を深める。